

学習者から見た文語文教育 —BUNGO-bun project 第 10 回研究会報告—

佐藤勢紀子

要旨

非日本語母語話者への文語文教育のあり方を考える BUNGO-bun project の第 10 回研究会を開催した。国内外から 32 名の参加があり、学習者から見た文語文教育について事例報告と討論が行われた。まず、4 名の文語文学習者により、研究テーマ、文語文学習歴、効果的だった指導法や学習法、学習上困難を感じた点などが報告された。討論では、大学における文語文教育カリキュラムの検討の必要性が示され、学習動機を高めるテキスト選定の重要さと学習者主体の授業の有効性が指摘された。事後アンケートの回答では、学習者側に焦点を当てた今回の企画を評価するコメントが多く見られるとともに、参加者が研究会を通じて各自の方向性を探り当てているケースもあることが示唆された。

キーワード

非日本語母語話者、文語文教育、文語文学習者、学習動機

1. 研究会開催の経緯

1.1 BUNGO-bun project

文語文学習を希望する非日本語母語話者は、日本研究志望者を中心に世界各地に存在するが、その学習環境は日本国内でも十分に整っているとは言い難い。文語文教育に携わる教師間の連携も薄く、それぞれが問題を抱えつつ手探りで教えているという状況である。

そこで、報告者は、関係者のネットワークを形成し、情報や知見の共有を通じて教育の質を高め、また教育・研修システムを構築することを目指し、2020 年に BUNGO-bun project を立ち上げた。同プロジェクトでは、オンライン教材“BUNGO-bun GO!”⁽¹⁾を公開するとともに、9 回の研究会、8 回のトークフォーラムを開催し（佐藤・虫明 2023、佐藤・虫明 2025）、bungonet⁽²⁾を通じて関係者間の情報共有、交流の促進を図っている。

1.2 学習者から見た文語文教育についての研究会の企画

9 回の研究会のうち第 4 回までの研究会では、文語文法、漢文訓読、くずし字という文語文教育の三つの柱をとりあげ、第 5 回研究会ではそれらの能力を養う総合的な教育・研修システムのあり方について考えた。第 6 回以降は各論の考察に入り、「近代文語文」、「アクティブ・ラーニング」、「和歌」、「和本」をテーマとしてきた。いずれの研究会でも専門家による事例報告とそれをめぐる討論を行なってきた。

第 10 回研究会では、文語文教育を捉える視点を、従来の教える側から学ぶ側へと移動させ、学習者から見た文語文教育というテーマを設定した。経験豊富な専門家による文語文教育の理念や実践方法の報告に接し、その知見を共有することはもちろん有意義であるが、一方、昨今の学習者のニーズや学習環境の現状をよりの確に把握し、今後の文語文教

育の方向性を考えていく上では、比較的近年において文語文を学んだ学習者側の捉え方を知っておく必要がある。そこで、出身、専門分野、研究対象とする時代やテキストの種類が偏らないように選んだ 4 名の若手研究者に事例報告を依頼し、文語文学習歴、効果的だった指導方法や学習方法、学習上の困難点などについて語ってもらうこととした。

2. 研究会の概要

2.1 登壇者と参加者

BUNGO-bun project 第 10 回研究会は、2025 年 2 月 22 日（土）21:00～23:00（日本時間）にオンラインで開催された。主催は BUNGO-bun project、共催は東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本語教室である。表 1 に登壇者の氏名とプロフィールを示す。

表 1 登壇者のプロフィール（登壇順）

	氏名	母語	身分	専門分野	研究対象とする時代	取り扱うテキストの種別
1	崔 鵬偉	中国語	博士研究員	哲学	中古	和漢混淆文
2	辛 悦	中国語	博士課程学生	文学	中世	和文（物語）
3	Paul BIMIER	フランス語	大学院特別聴講学生	史学	近世～近代	和漢混淆文、候文
4	Julia M. SUGAWARA	ドイツ語	博士課程学生	言語学	近代	和文（和歌）

開催に先立ち、bungonet、EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）のメーリングリスト、コテキリの会⁽³⁾等を通じてプログラムを周知した。研究会の参加者は 32 名で、その内訳は、母語別では日本語 15 名、その他 17 名、身分別では大学教員 14 名、元大学教員 2 名、大学非常勤教員 4 名、大学院生 9 名、その他 3 名であった。国別では日本、中国、ポーランド、クロアチア、スロベニア、フランス、アメリカ合衆国の 7 カ国から参加があった。

2.2 報告と討論

ここでは、事例報告およびそれに続く討論の内容をごく簡単に紹介する。

報告 1 は龍谷大学世界仏教文化研究センターの崔氏によるものであった。まず、諸事情から文語文入門の授業が受けられず、ほぼ独学で漢文訓読の方法を習得した経緯が語られた。かぐや姫伝説を下敷きにした映画『犬夜叉 鏡の中の夢幻城』（2002）が古文に関心を持つきっかけになり、その後百鬼夜行譚をテーマに説話文学の研究に着手したことが報告され、中国語話者にとっては『今昔物語集』などの漢文訓読調の文章が読みやすく、また平安漢文を読む上では和習の少ない『本朝文粹』などの正統漢文から入るのがよいという見解が示された。最後に文章構造の分析に重点を置いた漢文解釈の手順が示された。

東北大学の大学院生辛氏による報告 2 では、中国の教育課程における文語文教育が紹介され、大学ではアニメ作品に影響されて「ちはやぶる」の歌をテーマに卒論を書いたものの本格的な文語文学習はできず、大学院入学後の「源氏物語演習」での訓練により、初めて研究に取り組むための基本的な知識と技能を身につけることができたという経験が語られた。そして、現在中世王朝物語を対象にジェンダー研究に取り組む中での困難点とし

て、省略の多い物語文における読みの揺れとくずし字学習の 2 点が挙げられた。

報告 3 では、現在東京大学大学院で研鑽中の BIMIER 氏により、アニメ『ゴールデンカムイ』を見てアイヌに関心を持ち、修士課程で近世のアイヌ語通訳者について研究した経緯が語られた。また、フランス国立東洋言語文化大学、東北大学、フランス国立社会科学高等研究院、東京大学で文語文読解の訓練を受けてきたことが報告され、効果的な学習方法として、例文で意味を覚えること、語呂合わせ、発表に向けてのテキストの深い学習が挙げられた。一方、困難点として、候文の教科書が少ないこと⁽⁴⁾、授業・教科書の素材の多くが平安時代の作品で、江戸・明治時代の作品を読む機会が少ないことが挙げられた。

ボン大学の大学院生 SUGAWARA 氏による報告 4 では、まず、ボン大学の修士課程で『土佐日記』を、東北大学留学中に『平家物語』や『はて知らずの記』を読んだ経験が語られた。また、日本語能力試験 N1 に文語から派生した文法項目が多数出題されていることが指摘された。そして、現在の研究テーマ「文書から見た大震災における感情」に関連して与謝野晶子の震災歌が紹介され、文語文を通じて日本文化をより深く学ぶことができるという見解が示された。最後に、今後の文語文教育への要望として、ウェブ上でのアクセシビリティ、助動詞活用表などの整備、学習者の学習意欲向上のための工夫が挙げられた。

第 2 部では、約 50 分にわたり登壇者との質疑応答を中心に討論が行われ、登壇者を含め 9 名の参加者からの発言があった。主な論点になったのは、文語文学習の動機としてのアニメやマンガの影響、大学の文語文教育カリキュラムのあり方、助動詞活用表の効果的な作り方、日本語学習のどの段階から文語文学習に入るのがよいか、自分が文語文を教える立場になったらどのような授業をするか、などであった。カリキュラムに関しては、日本国外の大学での十分な文語文教育が難しいのはともかく、日本の大学で留学生向けの文語文入門授業の開講例が少ないのは、日本語や日本文化を外国人にアピールする上で大きな損失ではないかという意見があった。また、自分で文語文を教える場合の指導方法について、登壇者からは異口同音に学習者の学習動機を高めるテキスト選択が挙げられ、その他、学習者に発表させ主体的な取り組みを促すことの重要性が指摘された。

3. アンケートの結果

3.1 事後アンケートの実施

研究会参加者を対象に Google フォームによるアンケートを無記名で実施した。質問として、1) 母語 (日本語／他)、2) 身分、3) 満足度、4) 今回の研究会で特に印象的だったこと、5)～8) 各報告についてのコメント、9) 今回の研究会や BUNGO-bun project についての感想・意見、の 9 項目を設け、1)～4) の回答を必須とした。18 名の参加者 (母語話者 11 名、非母語話者 7 名) からの回答があった。

3.2 アンケートの回答

まず、質問 3) の研究会への満足度については、回答者全員が「1」 (満足できなかった) ～「10」 (とても満足した) の中で「8」以上を選択した。そのうち「9」もしくは「10」を選んだ特に満足度の高い回答者は 15 名で 83.3%を占めていた。

次に、質問 4) および 9) への回答から今回の研究会についてのコメントを見ると、まず、学習者側からの報告が参考になった、新鮮だったなどの感想が 4 名の回答者から寄せ

られ、第二弾を期待するというコメントもあった。学習者の視点で文語文教育を語るとい
う今回の企画が功を奏したようである。また、マンガやアニメが古典研究の動機となっ
ていることに注目する回答が 5 件見られた。これは討論でも指摘されていたことである。

さらに、今回の研究会や BUNGO-bun project への参加で新たな方向性を見出したという
コメントも見られ、活動の意義を確認することができた。たとえば、次のとおりである。

- ・他の方の困難の話、勉強の工夫を聞いて、自分の勉強方法を改善するための糸が見え
てきました。(非母語話者、大学院生)
- ・扱う題材、作品、何をどこまで教えるか…ということは、毎回とても悩むところだ
ので、今回はそれに関するヒントがたくさんもらえたように思っています。今後の励
みになりました。(母語話者、大学教員)
- ・このプロジェクトに参加して、私自身、改めて文語文の魅力、それを教えることを諦
める必要がないことを学びました。(母語話者、大学教員)

4. 今後の活動に向けて

以上、「学習者から見た文語文教育」というテーマで開催した BUNGO-bun project 第 10
回研究会について、その概要と事後アンケートの結果を報告した。研究会の開催を主軸と
する BUNGO-bun project での活動を通じて、個々の参加者の新たな気づきがあり、その積
み重ねが文語文学習や文語文教育の改善につながっていくということを、今回は特に強く
実感することができた。研究会の開催は今回で最終回となるが、トークフォーラムを継続
開催することで今後も文語文教育について語り合う機会を作っていきたいと考えている。

(佐藤勢紀子・さとうせきこ・東北大学・sekiko.sato.a4@tohoku.ac.jp)

付記

本研究会の開催は科学研究費助成事業基盤研究(C)20K00720 の助成によるものである。

注

1. <<https://bungobungo.jp/>>
2. 非母語話者を対象とする文語文教育の関係者のメーリングリスト。2025 年 2 月末時点
の登録者は 135 名となっている。
3. 同志社大学古典教材開発研究センター「古典教材の未来を切り開く!研究会」の略称。
4. 報告の中で、佐藤孝之監修、佐藤孝之・宮原一郎・天野清文著『近世史を学ぶための
古文書「候文」入門』(吉川弘文館、2003 年)が紹介されたが、候文学習のための参考
書は依然として少ない。

参考文献

佐藤勢紀子・虫明美喜 (2023)「日本語非母語話者への文語文教育を語る—トークフォー
ラム「かだらいん」(第 1 回～第 3 回) 実践報告—」『東北大学言語・文化教育センター
年報』8, 1-9.

佐藤勢紀子・虫明美喜 (2025)「和本で学ぶ文語文—BUNGO-bun project 第 9 回研究会報
告—」『東北大学言語・文化教育センター年報』10, 7-14.